

## 文脈における日中指示詞の対照研究

史 隼

### 要旨

今まで指示詞は日中対照分野において、主にどのような場合に話し手は「近い」と認識し、あるいは「遠い」と認識するのかという「遠近距離」の認識と使い分けとの関係であった。本稿では、日本語と中国語の指示詞の比較対照を行う場合には「そもそも指示詞を使うか使わないか」という観点から、日本語と中国語の指示詞の使われ方が何に由来するのか、それぞれの両言語の中ではどのような役割を持つのかについて考察した。

**キーワード**：日中指示詞、定性付与機能、持ち込み機能、意外性付与機能

### 1 はじめに

本稿では、日中対訳小説から分析した結果に基づいて、文脈指示における先行文脈をうけて名詞を修飾する指示詞の日中対照を行う。具体的な考察対象は、日本語は「この」「その」「あの」、中国語は“这+量詞” “那+量詞”である。たとえば、

日本語：	<u>この</u>		車
	指示詞		名詞
中国語：	<u>这</u>	<u>辆</u>	车
	指示詞	量詞	名詞

つまり、日本語の「この（指示詞）+車（名詞）」に対して、中国語では「“这”（指示詞）+“辆”（量詞）+“车”（名詞）」に対応している。

### 2 日中指示詞の定性付与機能

日本語では指示詞が用いられないところで中国語では指示詞が必須となる場合の対照を試みたい。

- (1) a. わたしは犬を飼っていた。しかし、{その/φ} 犬は去年死んだ。  
 b. \*我养过一只狗。但是，狗去年死了。  
 c. 我养过一只狗。但是，那只狗去年死了。

例(1a)の第2文は「犬」という名詞だけでも第1文の「私が飼っていた犬」ということを述べる文になるので意味が通じる。中国語と比較する前に日本語においてどのようなと

きに指示詞が必須で、またどのようなときに例(1a)のように必須ではないかについて分析を行う。

まず、日本語において指示詞が必須の場合である。

(2) 私は今ある言葉を習っている。{その/\* $\phi$ } 言葉は難しく大変だ。(庵功雄 1993)

(3) 昨日変な男に会った。{その/ $\phi$ } 男は私のことを知っていたようだ。

例(2)の第 2 文の「言葉」の前には指示詞が必須であるのに対し、例(3)の第 2 文の「男」の前には指示詞をつけてもつけなくても内容的に意味は通じる。

庵 (1993) によれば、これは名詞自身が定性を持っているかどうかの問題である。つまり例(2)の「言葉」という名詞は定性を持ちえない (あるいは、持ちにくい) のである。この類の名詞に対しては指示詞をつけないことを許容しない。つまり「言葉」という名詞は普通に「言葉」一般という意味になっている。例(2)のように第 1 文の「ある言葉」という個体を指す場合には限定機能を持っている「指示詞」で一つの言語の意味に限定しなければならない。しかし、このように抽象性の高い名詞でもすべての場合に定性を持っているわけではない。例(4)を見てみよう。

(4) 私は今ある言葉を習っている。{その/ $\phi$ } 言葉は易しいが文字が難しい。

(庵功雄 1993)

この例では、第 2 文の「言葉」の前に指示詞をつけなくても自然である。しかし、第 2 文の「言葉」は第 1 文の「言葉」と同じものを指し示しているのではなく、第 1 文の「言語」の中の「文字」以外の文法などの部分であり、範疇的に異なるものである。

もう一つの例を見てみよう。

(5) 風邪を引いている人がせきをすると、風邪のばい菌が空気の中に撒き散らされます。

{その/\* $\phi$ } 空気を吸うと、ばい菌が喉の中につきます。

(「こうないほうそう」林 1973)

例(5)の第 2 文の「空気」の前に指示詞「その」は必須である。上述したようにこれは「空気」という名詞自身が持っている定性が低いいため指示詞で定性を高めることによって個体の意味になる。これに対して例(3)の「男」のような名詞は自身が持っている定性が高いため指示詞が必須ではない。庵 (1993) によると、日本語ではこのように持っている定性が低い名詞は、たとえば「言語、言葉、空気、概念、美、原理…」のように抽象性の高い名詞で数はあまり多くない。

まとめてみると表(1)のようになる。

表(1)：日本語名詞定性について

名詞分類	定性	(例)	指示詞
抽象名詞	低い	「言葉、美、概念...」	→ 必須
普通名詞	高い	「犬、本...」	→ 必須ではない

ここまで、日本語の名詞が持っている定性の高低により、抽象名詞と普通名詞に大きく分けられることを見てきた。日本語は名詞が持つ定性の高低によって指示詞が必須となるかどうかが決まる。

- (6) a. 今ある言葉を習っている。{その/\*φ} 言葉は難しく大変だ。 (=4)  
 b. 正在学一门语言。{这门/\*φ} 语言很难。 (筆者による a の中国語訳)
- (7) a. 風邪を引いている人がせきをすると、風邪のばい菌が空気の中に撒き散らされます。{その/\*φ} 空気を吸うと、ばい菌が喉の中につきます。 (=5)  
 b. 得了感冒的人一咳嗽，细菌就会在空气中散播。吸了 {这些/\*φ} 空气后，细菌就会随之进入喉咙。 (筆者による a の中国語訳)

前に述べたように、日本語においては抽象名詞の個体を表すときに指示詞で限定することが必須であるが、同様に中国語訳文(6b) (7b)の第2文の指示詞も不可欠である。つまり、中国語抽象名詞においては、第1文の個体に対して第2文で再び同じ範疇の同じ個体を指し示すならば指示詞が必須である。裸の抽象名詞は事物の全体という範疇になっているので、限定しないと例(6b)ではすべての言葉、例(7b)ではすべての空気の意味になってしまう。

次に、日本語において先程の「原理」「空気」「言葉」などの抽象名詞のように指示詞が必須な場合ではなく、指示詞があってもなくても自然な場合を中国語と比較してみよう。

- (8) a. わたしは犬を飼っていた。しかし、犬は去年死んだ。  
 b. \*我养过一只狗。但是，狗去年死了。  
 c. 我养过一只狗。但是，那只狗去年死了。 (=1)

例(8a)日本語文では第1文の「犬」は「飼っていた特定の二匹の犬」の意味になっている。上述したように「犬」という名詞自身は定性を持っているため、第2文の個体の意味

1 “门”：〈量詞〉言語を数える場合に用いる。

になっている「犬」の前に指示詞をつけてもつけなくても個体の意味、つまり「特定の  
一匹の犬」になり自然である。

しかし、例(8b)中国語訳文の第 2 文のように指示詞をつけずに中国語の“狗 (犬)”に訳  
すと不自然な文になる。日本語文(8a)は「私は犬を飼っていた。しかし、その犬は去年死  
んだ。」という意味になるのに対し、中国語文は(8b)「私は犬を飼っていた。しかし、犬と  
いう動物は去年死んだ」という意味になり、通じない。中国語(8b)の第 1 文の“一只”で  
限定された“一只狗”は「一匹の特定の犬」という個体的範疇であるが、第 2 文の“狗”  
は総称名詞である“狗”一般であり、第 1 文と切り離された場合、解釈不可能である。こ  
れは中国語の“狗”という名詞が持っている定性が低いためである。例(8a)日本語文のよ  
うに指示詞「その」は省略可能であるのに対して、中国語では限定機能が働いている「指  
示詞」は例(8c)のように必須である。指示詞“那只”で総称名詞の“狗”を「特定の  
一匹の犬」の意味に限定し、前後文の言語的な繋がりを作る。つまり、ここでの“那只”  
は英語の冠詞「the」と類似した機能が働いている。

(9) I had a dog. The dog died last year. (筆者による(8a)の英語訳)

例(9)の英語文では、前文に定冠詞「a」で修飾したものが次の文で再び指される際に必  
ず冠詞の「the」で限定する。日本語と中国語は冠詞のない言語ではあるが、例(12)におい  
て“一只”は英語の不定冠詞「a」と同じ機能で、指示詞“那只”は定冠詞「the」と同じ  
く定性を保証する限定機能が働いている。

例(10)を見てみよう。

(10) a. 昨日変な男に会った。{その/φ} 男はわたしのことを知っていたようだ。(=(3))  
b. 昨日遇到一个奇怪的男人。{那个/\*φ} 男人好像认识我似的。  
(著者による中国語訳)

例(10a)では、上述したように第 2 文の「男」という名詞の定性が高いため指示詞をつけ  
てもつけなくても自然である。第 2 文は「すべての男は私を知っているようだ。」という  
意味にはならない。

しかし、例(10b)中国語訳では、第 2 文“男人”の前に指示詞がないと不自然な文になる。  
第 1 文は昨日会ったのは一人の特定の“男人”の意味になっているが、第 2 文は総称名詞  
“男”一般を使っているため、「すべての男の人は私を知っているようだ」という意味になる。  
それは“男人”という名詞も定性が低いためである。これで指示詞“那个”で総称名詞“男  
人”を一人の特定の“男人”に限定する。そのようにして、指示詞で“男人”を限定し、定  
性を高め、個体の意味、つまり特定の“男人”の意味になる。

前述のように、日本語では、定性の低い抽象名詞は指示詞をつけることで定性を高め、個体のものを指し示すが、定性を持っている普通名詞は指示詞をつけてもつけなくても自然である。一方、中国語では抽象名詞も普通名詞も全般的に持っている定性が低いため、前文と同じ個体の範疇を表すときには基本的に指示詞をつけなければならない。

しかし、この結論に反するように見える例(11a) (12a)のような文もある。

(11) a. 昨天回家的路上捡到一个钱包。钱包里有 300 块钱。

b. 昨日財布を拾った。財布の中に 300 元入っていた。

(筆者による a の日本語訳)

(12) a. 上周去爬山了。山上开着很多漂亮的花。

b. 先週山に登った。山の上にはたくさんの花が綺麗に咲いていた。

(筆者による a の日本語訳)

日本語文(11b) (12b)は、指示詞の使用がなくても自然な文であるが、中国語文(11a) (12a)の第 2 文は指示詞を使用する場合あるいは名詞を省略し“那里面 (その中)”はもちろん、“钱包 (財布)” “山”の前に指示詞をつけなくても不自然な感じはしない。結論を先に言えば、それは前後文の視点が変わったことに起因する。

例(11a)の視点は第 1 文の“钱包 (財布)”から第 2 文の“钱包里 (財布の中)”へ、例(12a)の視点は第 1 文の“山”から、第 2 文の“山上 (山の上)”へと変わった。しかも第 2 文の視点は第 1 文より、一段階絞り込まれ具体的になり、第 1 文と切り離されて解釈できる。もう一組の類似の対照を見てみよう。

(13) a. 昨天和妈妈去逛商店。商店里很热闹。

b. 昨日母と一緒にデパートに行った。デパートの中はとてもにぎやかだった。

(筆者による a の日本語訳)

(14) a. \*昨天和妈妈去逛商店。商店已倒闭了。

b. 昨日母と一緒にデパートに行った。デパートはもう閉店になっていた。

(筆者による a の日本語訳)

例(13a) (14a)を対照してみると、第 2 文の“商店 (デパート)”の前に指示詞をつけなければ例(13a)は自然な文に、例(14a)は不自然な文になる。それは上述したようにやはり視点の問題である。表でまとめると表(2)のようになる。

表(2)：中国語文(13a)と(14a)の前後文指示対象の対照

視点	例(13a)		例(14a)	
	第 1 文	第 2 文	第 1 文	第 2 文
	商店	商店里	商店	商店

表(2)に示したように、例(13a)は第 1 文の“商店 (デパート)”というものの視点から、それよりさらに具体的であり、その範疇の一部である“商店里 (デパートの中)”という視点が変わった。前文と同じものを指していないため、このとき指示詞は必ずしも必要ではない。しかし例(14a)では、前後文は同じく“商店”という視点になっている。この場合、前述したように“商店”という総称名詞は定性を持たないため、指示詞をつけて定性を高めることで第 1 文と同じ“商店”という個体の範疇にし、総称名詞“商店”を一つの特定の“商店”に限定する。もちろん例(13a)の第 2 文に指示詞をつけても意味は変わらない。

(15) 昨天和妈妈去逛商店。{那个/φ} 商店里很热闹。 (= (13a))

但し、例(15)において第 2 文の指示詞“那个”が修飾しているのは“商店里”ではなく、“商店”である。下の表を見てみよう。

表(3)：中国語文(15)において指示対象の範疇

例(15)	第 2 文		第 1 文
視点	那个商店里	≠	商店
	那个商店	=	商店

つまり、指示詞“那个”で“商店”一般を限定し、第 1 文の特定の“商店”を指している。“那个商店里”は第 1 文の特定の“商店”の「中」という視点になっている。

日本語についても次のようになる。

(16) 昨日母と一緒にデパートに行った。{そのデパートの中/デパートの中} はとてもにぎやかだった。 (= (13b))

(17) 昨日母と一緒にデパートに行った。しかし、{その/φ} デパートはもう閉店になっていた。 (= (14b))

前に分析したように、日本語では視点が変わらなくても日本語の「デパート」は定性が高い名詞なので、指示詞をつけなくても意味が通じる。視点が変わったとしても同様であ

り、結果として中国語と同じように指示詞をつけてもつけなくても意味は通じる。つまり、日本語の普通名詞は視点転換の影響を受けないのである。

さて、以上をまとめてみると、日本語では名詞は定性を持っているかどうか、また持っている定性の高低により指示詞が必須である場合と必須でない場合とに分けられる。定性の低い抽象名詞は指示詞で定性を高め、個体のものを指し示すが、定性の高い普通名詞はこれ以上に「定性」を付与する必要がなく、指示詞をつけてもつけなくても自然である。これに対して、中国語では名詞が持っている定性が低いため、前文で表された個体意味の名詞と同じ範疇を表すときは基本的に指示詞をつけて定性を保証しなければならない。

### 3 「その」の持ち込み機能

前節と異なって本節では日本語では指示詞が必須であるが中国語では指示詞の使用が不自然な場合を分析したい。

まず持ち込み機能の定義について、例(18)を見てみよう。

- (18) a. 人間は、昔から犬を友としていた。その犬はいろいろな病気の伝染者でもある。  
 b. \* 人类从很久以前就把狗当成朋友。这只狗也是很多疾病的传播者。  
 c. 人类从很久以前就把狗当成朋友。这个被人类当成朋友的狗却也是很多疾病的传播者。

例(18)の「その犬」は単なる犬ではなく、「人間は、昔から友としていた犬」であり、「その」は当該文に前文脈から「人間は昔から友としていた」という情報を「持ち込む」機能を担っている、という長田(1974)の指摘がある。

具体的に例(18)の日中指示詞を比べると、例(18a)では第1文の「犬」は総称名詞の「犬」であり、「犬一般」を指す。第2文の「その犬」も第1文と同じく総称名詞で「犬一般」を指す。ということは日本語指示詞「その」の指し示している「犬」は第1文の「犬」を指している。範疇的にも第1文と同じく「犬一般」であり、非限定である。そして、指示詞「その」は名詞を修飾し、第1文で述べられた「人間が昔から友としていた」という内容を指示している。つまり、指示詞「その」は第1文の内容を指し示し、そのまま第1文の内容を第2文に持ち込んで、「犬」の属性を表している。

例(18b)中国語文では第1文の“狗(犬)”は、総称名詞の“狗”であり、「犬一般」である。しかし、第2文では“这只”で“狗”を修飾しており、総称名詞“狗”が限定され、特定の一匹の犬を指すようになる。中国語“只”は日本語「匹」と同じく動物を数えるときに使う量詞である。つまり、ここでは第1文の総称の“狗”と第2文の特定されたある一匹の“那只狗”は明らかに範疇が違う。

中国語では、第 1 文の文脈を第 2 文でそのまま繰り返すという訳し方によって、日本語指示詞「その」の意味付与機能に対応できる。たとえば、例(18c)では、第 1 文の文脈“被人类当成友好的”は第 2 文でそのまま繰り返されている。

分かりやすくするためにもう一組類似の例を見てみよう。

- (19) a. パンダは子供たちの人気者である。しかし、そのパンダも昔、狩猟の獲物にされて激減したことがある。 (庵功雄 1997)
- b. \*熊猫在孩子们中很受欢迎。但是，这只熊猫在很久以前，也因为被捕猎而数量大减。 (筆者による a の中国語訳)

先般の例(18)と同様に例(19a)日本語文では第 1 文の「パンダ」は、総称名詞の「パンダ」であり、「パンダ一般」である。第 2 文の「そのパンダ」も第 1 文と同じく総称名詞で「パンダ一般」である。ということは、日本語文(19a)では指示詞「その」が指し示している「パンダ」は第 1 文の「パンダ」を指し、範疇も第 1 文と同じく「パンダ一般」である。そして、指示詞「その」は名詞「パンダ」を修飾し、第 1 文の文脈で述べられた「子供たちの人気者」というパンダの属性を指示している。

しかし、中国語訳文例(19b)では、第 1 文の“熊猫 (パンダ)”は、総称名詞の“熊猫”であり、「パンダ一般」である。しかし、第 2 文では例(19a)日本語文の「その」に対応する“这只”で“熊猫”を修飾すると特定の一匹のパンダを指すようになる。つまり、第 1 文の総称の“熊猫”と第 2 文の特定されたある一匹の“这只熊猫”とは明らかに範疇が違う。例(19b)の中国語の指示詞“这只”はここで第 1 文の総称名詞の“熊猫”を限定し、その「パンダ一般」の中の「特定の一匹のパンダ」を指し示している。

ここで、さらにもう一組の例を見てみよう。

- (20) a. ビタミンは体によく、美容にも効果的であると言われている。しかし、そのビタミンを取りすぎて、死亡した人もいた。
- b. \*众所周知，维他命对身体很好，对于美容也效果显著。但是，竟然有人因吃多了这种维他命死了。
- c. 众所周知，维他命对身体很好，对于美容也效果显著。但是，竟然有人因吃多了这种对身体很好，对于美容也效果显著的维他命死了。

(b と c は筆者による中国語訳)

2 “种”：〈量詞〉“只”と同じように事物のタイプを数える場合用いる。“一种商品（一種の商品）”“十种期刊（10種の定期刊行物）”

例(20a)日本語文では、第1文の「ビタミン」は総称名詞の「ビタミン」であり、「ビタミン一般」である。第2文の「そのビタミン」も第1文と同じく総称名詞で「ビタミン一般」である。ということは、日本語文(20a)では指示詞「その」が指し示している「ビタミン」は第1文の「ビタミン」に照応し、範疇も第1文と同じく「ビタミン一般」である。そして、指示詞「その」は名詞「ビタミン」を修飾し、第1文の文脈で述べられた「体によく、美容にも効果的である」というビタミンの属性をそのまま第2文に持ち込んだことになる。ここでは、日本語指示詞の「持ち込み機能」が働いていると見られる。

しかし、例(20b)中国語訳文は不自然な文である。第1文の“维他命(ビタミン)”は、総称名詞の“维他命”であり、「ビタミン一般」である。しかし、第2文の“这种”をつけると特定の種類のビタミンを指すようになる。ここでは、つまり、第1文の総称の“维他命”と第2文の特定されたある“维他命”は明らかに範疇が異なる。例(20b)の中国語指示詞“这种”はここで第1文の総称名詞の“维他命”を限定し、その「ビタミン一般」の中の「特定の種類のビタミン」を指し示している。

以上の対照分析から、三例とも日本語指示詞「その」が総称名詞(「犬」「パンダ」「ビタミン」)を修飾し、第1文のその名詞と同一範疇であるが、指示しているのは限定された第1文の内容であり、しかもその限定された第1文の内容を第2文に持ち込んでいる。三例とも中国語指示詞“这只”“这种”は総称名詞(“狗”“熊猫”“维生素”)を修飾し、その名詞を一つに限定し、指し示している。ということは、総称名詞を修飾する日本語指示詞「その」も第1文で述べた事物のある属性を第2文に持ち込んでおり、その属性を指す機能を持っている。これに対して、中国語において総称名詞を修飾する指示詞は第1文脈を第2文に持ち込む機能を持っていない。

#### 4 「その」の意外性付与機能

3では日本語指示詞「その」と中国語指示詞の「持ち込み機能を持っているかどうか」について分析したが、本節ではその上で、前後文の内容の関係から日中指示詞を見てみよう。

(21) 健は病気知らずが自慢の男だった。その健ががんであつげなく、死んでしまった。

第1文と第2文の意味から見ると、両文の間に「意外性」を感じる。第1文と第2文は対比的、逆接的な意味になっているからである。分かりやすくするためにもう一つ例文を加えて比較してみよう。

(22) 健は病気知らずが自慢の男だった。(その) 健は先日還暦のときも1升瓶を一人で空けた。  
(庵功雄 1997)

例(21)(22)の第 2 文では、「健が」と「健は」の違いがある。庵 (1997) によると、「し  
かし」がない場合、第 1 文の文脈の内容と対立的な内容の場合、「が」が使われやすいが、  
非対立的な内容を述べる場合、「は」が使われやすい。

例(21)と例(22)の第 1 文は健の「病気知らずが自慢」というまったく同じ属性を表して  
いて、違っているのは第 2 文だけである。例(22)の第 2 文「還暦のときも 1 升瓶を一人で  
空けた」という文脈から、健の「とても元気な男」といった属性が表れている。これは、  
「その」で第 1 文から第 2 文に持ち込まれた「病気知らずが自慢」という属性と、類似の  
属性である。第 1 文と第 2 文の間がとても密接に繋がっていると言えるであろう。

例(22)の前後文が類似の属性を示しているのに対して、例(21)の前後文は対比の内容で  
あり、「まさか、ありえない」という意味が含まれている。なぜならば、第 1 文の「病気  
知らずが自慢」という属性に対して、第 2 文で健は「がんという病気で死んでしまった」  
ことから、健の「元気ではない男」という属性が表れているからである。「その」で第 1  
文から持ち込まれた属性「元気な男」と第 2 文で述べられている属性「元気ではない」が対  
比的に第 2 文に存在し、内容的に緊密に結びつかない。そこで、例(21)の「その」は、例  
(22)の「その」とは異なり、前後の文脈の属性が対比的であることから、「まさかその」と  
いった「意外性」が出てくる。しかも、例(21)のように日本語においては、「その」があれば、  
健の属性と健のやったことを並べるだけで十分にその「意外性」が表わされている。

また、例(22)では、例(21)とは違って、文と文の間の繋がりが存在しているため、指示  
詞「その」をつけなくても自然である。つまり、例(22)のように前後文の内容が対比的で  
ない場合には、必ずしも指示詞をつける必要がない。

例(21)と例(22)の第 2 文の属性関係を表にすると、以下の表(4)のようになる。

表(4)：日本語文(21)(22)の第 2 文の属性関係

固有名詞	「その」属性 (第 1 文の文脈から)	第 2 文の属 性	第 2 文の文脈属性
例(21)	病気知らずが自慢	←対比→	元気ではない
例(22)	病気知らずが自慢	=類似=	元気である

続いて、例(21)(22)に対する、中国語訳文(23)(24)を見てみよう。

(23) \*健是一个以不知生病为何物而自豪的男子。这个健因为癌症死去。

(筆者による(21)の中国語訳)

(24) \*健是一个以不知生病为何物而自豪的男子。这个健在 60 大寿时喝光了一瓶一升的酒。

(筆者による(22)の中国語訳)

例(23)(24)はともに不自然な中国語訳文である。その原因としては、前節述べたように、中国語において名詞を修飾する指示詞は第1文の内容を第2文に持ち込む機能を持っていないことが挙げられる。つまり、例(23)(24)の第1文の「健が元気」という属性はそれぞれの第2文で表わされていない。したがって、例(23)(24)はどちらも、第2文において属性は対比的にならない。もちろん、「まさかその」といった「意外性」も出ていない。中国語においては、「まさか」という意味を持っている副詞“竟”や“却”などを使ってその「意外性」を表し、前後両文の間の繋がりを作ることになる。

たとえば、例(25)。

(25) \*健是一个以不知生病为何物而自豪的男子。这个健竟在60大寿时喝光了一瓶一升的酒。

もう一つの例を見てみよう。

(26) a. パンダは子供たちの人気者である。しかし、そのパンダも昔、狩猟の獲物にされて激減したことがある。

b. \*熊猫在孩子们中很受欢迎。但是，这只熊猫在很久以前，也因为被捕猎而数量大减。

日本語文(26a)の第1文ではパンダの「子供たちの人気者である」という属性が表されている。第2文では、パンダは「昔、狩猟の獲物にされて激減したことがある」ということから、パンダは「大事にされていない」という属性が表されている。「その」で第1文から持ち込まれた属性「大事にされている」と第2文の文脈が持っている属性「大事にされていない」とが対比的に第2文の中に存在している。前後の文脈が類似した属性の場合には内容が緊密に結びつくが、対比的な属性の場合には内容が緊密には結びつかない。このため、「まさかその」といった「意外性」が出てくる。

以上の分析を表で示すと、表(5)のようになる。

表(5)：日本語文(26a)の前後文属性関係

固有名詞	「その」属性 (第1文の文脈から)	第2文属性関係	第2文の文脈属性
例(26a)	大事にされている	←対比→	大事にされていない

例(26a)に対しての中国語訳文(26b)パンダは「大事にされていない」という属性のみが表されており、前後の文脈の属性は対比的にならない。もちろん「まさかその」という「意外性」も出ていない。

このことから考えると、中国語指示詞は日本語文(21)の「その」の前後文の対比の属性によって現れる「まさか、ありえない」という「意外性」を表す機能を持っていないと言える。つまり、日本語指示詞「その」には意外性付与機能があるのに対して、中国語指示詞は持っていない。

## 5 終わりに

本稿では、文脈において指示詞——日本語は「この」「その」「あの」、中国語は“这+量詞”“那+量詞”——の対照を行った。

結論は表(6)のようになっている。

表(6)：文中で指示詞がさす事柄と日中指示詞の働き

指示詞がさす事柄	日本語指示詞	関係	中国語指示詞
文脈	定性付与機能 (必須ではない)	⇔	定性付与機能 (必須)
	意外性付与機能	⇔	用いることが出来ない
	持込み機能	⇔	用いることが出来ない

簡単にまとめると、日本語では名詞は定性を持っているかどうか、持っている定性の高低により指示詞が必須の場合と必須でない場合とに分けられる。定性の低い抽象名詞は指示詞で定性を高め、個体ものを指し示すが、定性の高い普通名詞はこれ以上「定性」をつける必要がなく、指示詞をつけてもつけなくても自然である。その一方で、文脈指示の「その」は「限定機能」以外に前文の内容を後文に持ち込む「持ち込み機能」が働いている。

これに対して中国語では名詞は持っている定性が低いため、前文で表された個体意味の名詞と同じ範疇を表すときに、基本的に指示詞をつけて定性を保證する必要がある。一方、文脈指示では指示詞は主に「限定機能」が中心で「持ち込み機能」を持っていない。先行文脈から特定される文脈が多い場合、指示詞だけでは後文に持ち込めないため、その文脈を全部第 2 文で繰り返すことになる。

## 参考文献

- 庵功雄 (1993) 「この」と「その」の文脈指示用法の研究—日本語における定情報の扱われ方— 大阪大学修士論文
- (1997) 「は」と「が」の選択に関わる一要因 『国語学』 188 集
- 金水敏・田窪行則 (1992) 『日本語研究資料集 指示詞』 くろしお出版
- 田中望 (1981) 「コソア」をめぐる諸問題 『日本語の指示詞』 8 国立国語研究所

中みき子（1990）「小説における日・中指示詞の機能の差異について」京都外国語大学研究論叢 35

長田久男（1974）「連文の諸相(1)ーコ・ソ・ア系統の指示詞による意味の持ち込みという現象ー」『岡山大学教育学部研究集録』38

呂叔湘（1980）『近代漢語指代詞』学林出版社

#### 付記

本稿は、2007年1月に提出した修士論文「日中指示詞の対照研究」第3章の一部をまとめたものである。

（し しゃく 言語社会研究科博士後期課程）